

青年期女性の恋愛観に関する尺度構成の試み

阪 井 俊 文*・中 村 晋 介**

要旨 本研究の目的は、青年期女性の恋愛観を測定するための尺度を作成することである。これまでも、同様の試みは数多く行われているが、先行研究の問題点を指摘した上で、それを改善することで現代の青年期女性に適合する尺度項目を選定し、大学生と専門学校生を対象にして質問紙調査を実施し、1341名の回答を得た。因子分析の結果、「恋愛向上志向」「恋愛苦悩志向」「恋愛没入志向」「恋愛享楽志向」「恋愛実利志向」「友愛志向」の6因子が抽出され、統計的にその妥当性も確認された。また、いくつかの因子は専門学校生と大学生で結果が異なっており、これらの恋愛観の個人差に、階層などの社会的要因も影響していることが示唆された。今後は、この尺度を活用することで、心理的要因と社会的要因の双方について、個人の恋愛観に及ぼしている影響が解明されることが期待される。

キーワード 恋愛観, 青年期女性, 尺度構成, 社会階層

1. 目的と問題

恋愛は、思春期から青年期にかけての重要なトピックとして心理学と社会学いずれの視座からも多くの研究が行われてきた。特に心理学においては、様々な理論に基づき個人の恋愛観を測定する尺度が数多く考案されてきた。本研究は、先行研究の問題点を指摘した上でそれらを改良することで、今後の恋愛研究に活用できる尺度の作成を目的とする¹⁾。

恋愛観を測定する尺度の中でも特によく知られたものに、Lee (1977) の恋愛の色彩理論に

基づいた松井・木賊・立澤・大久保・大前・岡村・米田 (1990) による尺度 (LETS-2) がある。この尺度は、恋愛を「ルダス (遊びの愛) : 恋愛をゲームと捉え、楽しむことを大切に考える相手に執着せず、相手との距離をとっておこうとする」、「マニア (狂気的な愛) : 独占欲が強い、嫉妬、憑執、悲哀などの激しい感情を伴う」、「プラグマ (実利的な愛) : 恋愛を地位の上昇などの手段と考えている」、「エロス (美への愛) : 恋愛を至上のものと考えており、ロマンティックな考えや行動をとる」、「ストルゲ (友愛的な愛) : 穏やかな、友情的な恋愛、長い時間をか

*北九州市立大学・非常勤講師

**福岡県立大学人間社会学部・准教授

けて、知らず知らずのうちに、愛が育まれる」、
「アガペ（愛他的な愛）：相手の利益だけを考え、
相手のために自分自身を犠牲にすることも厭わ
ない愛」の6つに分類しており、類型論的に捉
えている点に特徴がある。この尺度は、その後
の恋愛研究において用いられることが多く、例
えば、水野（2006）は項目数を減らした簡易版
を作成した上で、パーソナリティや社会的スキ
ルなどの個人特性との関連性を検討している。
このように、心理学においては、恋愛観は、個
人が有する性格特性の1つのように扱われてい
る場合が多い。

上述の研究を含む2000年代までの研究では、
現代日本の青年たちの圧倒的多数が、「恋愛」
に大きな関心を寄せ、そこに高い価値を付与
しているという前提で行われてきた（e.g. 上野
2004：15、谷本 2008：9-12）。この発想の背後
には、「青年期に入れば、基本的に全員が異性
（あるいは同性）への恋愛に興味を持ち、恋愛
積極性を高め、いずれは誰かと恋愛関係を構築
する」という仮定が無批判に存在していたと考
えられる。しかし、高坂康雅が指摘するように、
2000年代後期から、恋人を欲しいと思わない青
年——少なくとも質問紙調査や聞き取り調査に
おいてこう回答する者——の存在が指摘され始
めた。2010年代に入ると、こう回答する青年
の割合は全体の20～30%を占めるようになり、
かつての発想や前提それ自体の正当性が疑われ
はじめている（高坂2016：4、137）。若者にとつ
ての「恋愛の意味」は、時代とともに変化する
ものと捉える必要があるだろう。無論、時代だ
けでなく、国や地域、社会階層など様々な社会
的要因が恋愛のあり方に影響していることは疑
いようがないであろう。恋愛観を測定する尺度
を作成し、それをを用いた研究を行う際にも、そ

うした社会的要因を踏まえた上で調査対象者に
適した尺度を用意する必要がある。

社会的要因を重視している先行研究として、
上野（2004）による青年期女性の恋愛観につい
ての考察が挙げられる。上野は、男性を対象と
した恋愛に関する言説と女性を対象としたそれ
との違いを指摘した上で、女子大学生のみが持
つ恋愛観を分析し、因子分析によって4つに分
類している²⁾。その4因子とは、1)恋愛向上
思想：恋愛をすることによって（自分の）精神
性が向上し、生活や人生の質的な向上が起こる
という態度、2)恋愛享楽主義：恋愛に娯楽的
な要素以上のものを求めない態度、3)恋愛没
入主義：生活の中で恋愛を最重視し、それへの
没頭を肯定する態度、4)恋愛苦悩傾向：恋愛
の中に切なさや精神的な苦悩を感じる態度、で
ある。これら4つの恋愛観の個人的傾向を把握
するために、上野は30項目で構成される尺度を
提唱した。

これらの恋愛観は、若者が接する雑誌や恋愛
本、恋愛関連のホームページの掲示板などから
収集されたものであるため、恋愛の社会・文化
的側面が十分に反映されていると考えられる。

だが、雑誌などのメディアの言説から恋愛観
を収集するという手法で、現代の青年期女性の
恋愛観の全体を把握できるのかという疑問が残
る。上野による4因子を、先に述べたLETS-2
と比べてみると、第1因子はプラグマ、第2因
子はルダス、第3因子はアガペとエロス、第4
因子はマニアに類似している。従って、上野の
尺度には、ストルゲに相当するような要素は含
まれていないことになる。また、Leeの理論に
よるプラグマとは、自身の地位向上や資源の獲
得など、いわゆる“玉の輿”のような関係を志
向することを指しており、精神的な面での作用

を指す上野の第1因子とは意味が異なる。では、これらの恋愛観を有する青年期女性は少ないのであろうか。ここで、メディアの恋愛言説から抽出するという手法が問題となる。メディアによって語られやすいタイプの恋愛と、必ずしもそうでない恋愛がそれぞれ存在することが想定できるからである。第3因子の没入するような恋愛や、第4因子の悩み苦しむといった恋愛のあり方は、小説や少女マンガ、流行歌の歌詞など文藝作品において描かれることが少なくない。劇的、感動的なストーリーになりやすい恋愛のあり方は、言わば“メディア映え”するため、様々なメディアに掲載されやすいであろう。一方で、ストルゲのような、穏やかで友人関係に近い恋愛のあり方は、メディアの題材としては面白みに欠けることになるだろう。また、プラグマのような実利を求める恋愛のあり方は、社会的な規範に反するため、メディアによって語られることは憚られている可能性がある。従って、上野が現代の若者向けメディアから抽出した恋愛観に、メディアにおいて語られにくい恋愛観を補完することで、恋愛観をより包括的に捉える尺度を作成することができる。そこで、本研究では、上野が作成した尺度にプラグマとストルゲを追加して妥当性を検証する。

先行研究における問題として、社会的要因を考慮していない場合が多い点を指摘したが、そのことにより調査対象者の属性の偏りという問題も生じている。前述の松井ら(1990)の他にも、恋愛イメージ尺度を作成している金政(2002)、恋愛に対する態度尺度を作成している和田(1994)などの先行研究は、いずれも大学生・短大生を対象としている³⁾。これは恋愛研究に限ったことではないが、量的調査の

技法をもって、青年期の若者の意識や価値観を研究した社会学や心理学の研究の多くは、研究者の多くが大学/短大の教員であるため、調査対象者が大学生や短大生に限定されてしまうことが多い。しかしながら、2016年の大学等進学率は男子52.1%、女子56.9%に過ぎない(総務省2017)。幼少期の家庭環境や社会環境の影響を受けやすい意識や価値観を取り扱う場合、大学や短大に進学した者のみを対象にした調査で得られた結果を、青年期の若者一般の意識や価値観として一般化することには課題があると思われる。この点に鑑み、本研究では、公立大学と私立大学の大学生に加えて、複数の専門学校⁴⁾の学生も対象とすることで、先行研究よりも幅広い階層のデータを収集し、青年期女性の恋愛観として、より妥当性の高い尺度の作成を目指す。

2. 方法

2.1 調査対象者

4年制大学5校(公立大学2校、私立大学3校)と専門学校4校(看護専門学校2校、アニメ・マンガ系専門学校1校、美容系専門学校1校)の女子学生を対象とした。

調査協力校に対し計1500票の調査票を配布した結果、1341票の有効票が得られた。この有効票1341のうち、本研究の目的を鑑み、調査時点の年齢が18歳未満の者、23歳以上の者、および年齢を回答しなかった者を除外して、1303名を分析対象とした(表1)。分析対象者の平均年齢は19.37歳、年齢の標準偏差は0.982であった。所属の内訳は大学生61.1%、専門学校生38.9%となった。

表1 調査対象者の校種別人数

種別	校数	有効票数	%	分析対象	%
公立大学	2	369	27.5	364	27.9
私立大学	3	437	32.6	433	33.2
看護専門学校	2	180	13.4	166	12.7
アニメ・マンガ系専門学校	1	102	7.6	97	7.4
美容系専門学校	1	253	18.9	243	18.6
合計	9	1341	100.0	1303	100.0

2.2 実施方法

講義終了後の休憩時間に、無記名式の自記式質問紙を配布し、その場で回答を求めた（一部の専門学校では、ガイダンスやホームルームなどの時間を利用して実施した）。実施に際しては、倫理的配慮として、調査への協力は任意であり、答えたくない質問には回答しなくてもよいこと、成績等に影響することはないことなどを説明した。なお、本研究で使用する調査票の質問項目、調査の実施方法、データの管理などについては、福岡県立大学研究倫理審査委員会の審査を受けて承認されている。

2.3 質問項目

上野（2004）の恋愛観尺度は30項目で構成されているが、本研究では前述したようにプラグマとストルゲの項目を追加する。そのため上野の項目をすべて用いると項目数が多くなってしまい、それにより回答者の負担が大きくなることや、作成した尺度の汎用性が低下することを考慮し、上野（2004）で負荷量がやや低くなっている項目を割愛し、26項目を用いた。また、「恋愛没入主義」因子については、他の因子にも高い負荷量を示している項目が多いため、それらを割愛し、より明瞭な文章となるように考慮した質問項目を追加した（表2）。

プラグマとストルゲはLETS-2から抜粋したが、こちらも全体の項目数が多くなりすぎないように、それぞれ4問と3問のみを抜粋して追加した（表2）。なお、2つの先行研究による質問項目を混合して用いるにあたり、語感を揃えるためにいくつかの項目のワーディングを修正し、順番を適宜並び替えて質問紙を作成した。合計33の設問に対して、「4：そう思う」、「3：ややそう思う」、「2：あまりそう思わない」、「1：そう思わない」の4件法で回答を求めた。

2.4 結果

探索的因子分析を行うにあたり、はじめに天井効果、フロア効果を測定したところ、問6、問9、問22の3設問で効果が見られた。しかしながら、項目の内容を吟味したところ、いずれの質問項目についても、本稿で取り上げる概念を測定する上で不可欠なものと考えられた、そこでここでは項目を除外せず、すべての質問項目を以降の分析対象とした（表3）。

因子抽出には最尤法を用い、回転にはpro-max法を使用した⁴⁾。6因子構造または7因子構造が示唆されたが、複数の因子に負荷量が高い2変数（問11、問25）を削除した上で再分析を試みたところ、Guttman基

表2：今回の調査で使用した恋愛観尺度の質問群

測定概念	質問文	上野論文で 相当する質 問の番号
恋愛向上思想	恋愛をしていると生き生きする	1
	恋愛は人生の糧(かて)となる	2
	恋愛をするとおたがいが向上する	3
	恋愛とは信頼したり尊敬したりすることを学ぶものだ	4
	恋愛によって自分がみがかれると思う	5
	恋愛にはときめきがあればそれでいい	7
	恋愛がなければ、人生はつまらない	8
	恋愛には刺激が必要だ	9
	恋愛をすると、自分のことがわかるようになるはずだ	10
	恋愛享楽主義	恋愛は楽しければいい
恋愛はときめく気持ちが必要である		13
恋愛はひまつぶしとしていちばん楽しいものだ		14
恋愛しているときに、進展がないと気持ちが薄れてしまう		15
恋愛は面倒なものである		18
恋愛は経験をつむためにするだけのものだ		19
恋愛没入主義	恋愛しているときは自分を見失う	20
	恋愛は生活のすべてだ	
	友だちよりも、恋人のほうを優先させたい	
	恋愛をしていないと、日々の活力が不足する	
	恋愛している間は、恋人ふたりだけが幸せであれば満足である	
恋愛苦悩傾向	恋愛をしていると、相手以外のことが見えなくなる	28
	恋愛において、相手に対する思いが深まるほど、自分が苦しくなる	25
	恋愛をしているとせつなくなる	26
	恋愛をしていると気分の浮き沈みが激しくなる	27
	恋愛をしていると、恋にとらわれている自分がおろかに見える	29
プラグマ (恋愛実利志向)	恋愛をしていると、平穏な生活ができなくなる	30
	恋人を選ぶときには、相手に経済力があるか考えるべきだ	31
	恋人を選ぶときは、その人とのつきあいが、私の経歴にどう影響するかを考えるべきだ	
恋人を選ぶ前に、自分の人生を計画することが大切だ		
ストルゲ (友愛志向)	結婚する気のない男性とは本気でつきあえない	32
	長いつきあいの友人から恋人を選ぶと、良い恋愛になる	
	恋愛関係になっても、相手との友情を大切にしていけばいい	
	友だちとして接している人の中から恋人を見つけるべきだ	33

表3：天井効果・フロア効果測定

	度数	平均値	標準偏差	天井効果 測定	フロア 効果測定
1) 恋愛をしていると生き生きする	1282	2.88	.909	3.79	1.98
2) 恋愛は人生の糧となる	1283	2.83	.865	3.69	1.96
3) 恋愛をするとおたがいが向上する	1281	2.83	.855	3.69	1.98
4) 恋愛はときめく気持ちが必要である	1283	3.09	.811	3.90	2.28
5) 恋愛がなければ、人生はつまらない	1281	2.37	.971	3.34	1.40
6) 恋愛には刺激が必要だ	1281	2.58	1.513	4.09	1.07
7) 恋愛は楽しければいい	1283	2.53	.891	3.42	1.64
8) 恋愛にはときめきがあればそれでいい	1281	2.21	.826	3.04	1.39
9) 恋愛はひまつぶしとしていちばん楽しいものだ	1280	1.65	.758	2.40	0.89
10) 恋愛している時に、進展がないと気持ちが薄れてしまう	1281	2.32	.918	3.24	1.40
11) 恋愛は面倒なものである	1280	2.66	.891	3.55	1.77
12) 恋愛は生活のすべてだ	1280	1.48	.665	2.15	0.82
13) 友だちよりも、恋人の方を優先させたい	1276	1.81	.778	2.59	1.03
14) 恋愛をしていないと、日々の活力が不足する	1278	1.79	.923	2.71	0.87
15) 恋愛している間は、恋人ふたりだけが幸せであれば満足である	1281	1.72	.781	2.50	0.94
16) 恋愛しているときには自分を見失う	1277	1.91	.880	2.79	1.03
17) 恋愛において、相手に対する思いが深まるほど、自分が苦しくなる	1278	2.26	1.056	3.32	1.20
18) 恋愛しているときはせつなくなる	1277	2.34	.949	3.28	1.39
19) 恋愛をしていると気分の浮き沈みが激しくなる	1278	2.47	1.012	3.48	1.46
20) 恋愛をしていると、相手以外のことが見えなくなる	1277	1.96	.885	2.84	1.07
21) 恋愛をしていると、恋にとらわれている自分が見えなくなる	1277	2.07	.929	3.00	1.14
22) 恋愛をしていると、平穏な生活ができなくなる	1279	1.78	.797	2.58	0.98
23) 恋愛によって自分みががかれると思う	1278	3.01	.822	3.84	2.19
24) 恋愛とは信頼したり尊敬したりすることを学ぶものだ	1278	3.10	.751	3.85	2.35
25) 恋愛は経験をつむためにするだけのものだ	1274	2.05	.828	2.88	1.22
26) 恋愛をすると、自分のことがわかるようになるはずだ	1270	2.51	.796	3.31	1.72
27) 恋人を選ぶときには、相手に経済力があるかを考えるべきだ	1275	2.60	.840	3.44	1.76
28) 恋人を選ぶときは、その人とのつきあいが私の経歴にどう影響するかを考えるべきだ	1273	2.27	.845	3.11	1.42
29) 恋人を選ぶ前に、自分の人生を計画することが大切だ	1271	2.53	.916	3.44	1.61
30) 結婚する気がない男性とは本気でつきあえない	1274	2.41	.940	3.35	1.47
31) 長いつきあいの友人から恋人をえらぶと、良い恋愛になる	1271	2.39	.814	3.21	1.58
32) 恋愛関係になっても、相手との友情を大切にしていくなべきだ	1276	3.11	.763	3.87	2.34
33) 友だちとして接している人の中から、恋人を見つけるべきだ	1272	2.10	.765	2.86	1.33

準, Scree基準ともに6因子構造が示唆された。これより, 著者らは, 6因子構造を妥当と判断してパターン行列を作成した(表4, 表5)。なお, 削除前の問11の因子負荷量は, 第1因子より順に-.304, .264, .156, -.195, .113, .092, 問25の負荷量は, 順に.040, -.006, .290, .054, .236, .092であった。パターン行列作成時の固有値の変化を表5に示す。探索的因子分析におけるKaiser-Meyer-Olkinの標本妥当性の測度は.915, Bartlettの球面性検定の結果は, $\chi^2=16491.036$ (df=465, $p < .001$)である。また, 回転前の6因子で31項目の全分散を説明する割合は57.908%であった。因子数を7としたパターン行列も作成してみたが, この場合, 最後の因子を構成する質問項目が1項目だけとなったため不適当とした。

「恋愛していると生き生きする」「恋愛をしようとおたがいが向上する」といった質問に高い因子負荷量を持つ第1因子は, 上野が指摘した「恋愛向上思想」を示すものである。恋愛による気分の落ち込みや変動を問うた質問群に高い因子負荷量を示す第2因子, 恋愛を生活の中心に置こうとする質問群に高い因子負荷量を示す第3因子, 恋愛の楽しさを肯定する質問群に高い因子負荷量を示す第4因子は, それぞれ, 上野による指摘を参考に調査設計段階で意図した「恋愛苦悩傾向」「恋愛没入主義」「恋愛享楽主義」に相当していた。

第5因子, 第6因子にそれぞれ高い因子負荷量を示す設問群は, プラグマ, ストルゲを測る質問に基づいた4設問, 3設問である。各因子の信頼性係数は, 第1因子 $\alpha = .885$, 第2因子 $\alpha = .882$, 第3因子 $\alpha = .902$, 第4因子 $\alpha = .733$, 第5因子 $\alpha = .691$, 第6因子 $\alpha = .599$ となっている。第5, 第6因子に関する信頼性

係数がいささか低い原因は, これら2因子を構成する質問項目数が少なかったことに由来していると考えられる。本尺度を再検討する機会があれば, 質問項目を増やした上での分析を試みたい。

上野論文やLETS-2にしたがうならば, 今回抽出された因子の名称は, それぞれ「恋愛向上思想」「恋愛苦悩傾向」「恋愛没入主義」「恋愛享楽主義」「プラグマ」「ストルゲ」となるが, これではいささか語感に統一性がない。このため, 本稿ではこれらの名称を少し改変し, 「恋愛向上志向」「恋愛苦悩志向」「恋愛没入志向」「恋愛享楽志向」「恋愛実利志向」「友愛志向」と命名した。

この因子構造の妥当性を確認するために, 確証的因子分析を行った。その結果, 各因子から該当する項目へのパスは全て有意となり, モデルの適合度指標は, $\chi^2=2700.04$, $df=419$, $p < .001$, $GFI = .857$, $AGFI = .830$, $CFI = .859$, $RMSEA = 0.67$ であった。いずれも許容できる値であり, 本モデルの妥当性が確認できたと判断した。

各因子の合計点を項目数で割ったものの平均を表6に示す。属性による違いを検討するため, 回答者を大学生と専門学校生に分けてt検定を行った結果, 「恋愛向上志向」「恋愛没入志向」「恋愛実利志向」の3因子で有意な差が見られた。順に, $t(960.67) = 2.16$ $p < .050$; $t(1268.00) = 2.21$ $p < .050$; $t(1263.00) = 2.47$ $p < .050$ となった。いずれも大学生よりも専門学校生で得点が高かった。

表4：因子分析結果（パターン行列）

	1	2	3	4	5	6
問6 a：恋愛観：恋愛をしていると生き生きする	.847	-.016	.078	-.075	-.051	-.050
問6 b：恋愛観：恋愛は人生の糧となる	.833	-.029	.110	-.096	-.029	-.013
問6 c：恋愛観：恋愛をするとおたがいが向上する	.811	-.136	.077	-.011	-.082	.081
問7 a：恋愛観：恋愛によって自分がみがかれると思う	.660	.049	-.052	-.012	.044	.027
問6 d：恋愛観：恋愛はときめく気持ちが必要である	.643	.089	-.207	.193	.073	-.042
問7 b：恋愛観：恋愛とは信頼したり尊敬したりすることを学ぶものだ	.559	.031	-.095	-.015	.009	.211
問6 e：恋愛観：恋愛がなければ、人生はつまらない	.462	.002	.227	.104	.114	-.145
問7 d：恋愛観：恋愛をすると、自分のことがわかるようになるはずだ	.447	-.047	.079	-.024	.136	.124
問6 f：恋愛観：恋愛には刺激が必要だ	.313	.014	.025	.139	.091	-.126
問6 r：恋愛観：恋愛しているときはせつなくなる	.160	.813	-.156	.027	-.085	.019
問6 s：恋愛観：恋愛をしていると気分の浮き沈みが激しくなる	.158	.799	-.062	-.003	-.079	-.025
問6 u：恋愛観：恋愛をしていると、恋にとらわれている自分が見えなくなる	-.159	.774	-.076	.001	.089	.067
問6 q：恋愛観：恋愛において、相手に対する思いが深まるほど、自分が苦しくなる	.100	.737	.011	-.037	-.093	.011
問6 p：恋愛観：恋愛しているときには自分を見失う	-.051	.697	.166	-.082	.081	-.075
問6 t：恋愛観：恋愛をしていると、相手以外のことが見えなくなる	.012	.688	.172	-.039	-.027	-.001
問6 v：恋愛観：恋愛をしていると、平穏な生活ができなくなる	-.238	.680	.129	.043	.065	.066
問6 m：恋愛観：友だちよりも、恋人の方を優先させたい	.019	.026	.692	-.048	-.076	.061
問6 l：恋愛観：恋愛は生活のすべてだ	-.007	-.018	.645	.115	-.022	.024
問6 n：恋愛観：恋愛をしていないと、日々の活力が不足する	.191	.105	.547	.006	.001	-.063
問6 o：恋愛観：恋愛している間は、恋人ふたりだけが幸せであれば満足である	.004	.071	.538	.138	-.021	.033
問6 h：恋愛観：恋愛にはときめきがあればそれでいい	.058	-.003	.008	.852	-.103	.023
問6 g：恋愛観：恋愛は楽しければいい	.031	-.087	.022	.785	-.117	.095
問6 i：恋愛観：恋愛はひまつぶしとしていちばん楽しいものだ	-.181	-.017	.204	.470	.157	-.008
問6 j：恋愛観：恋愛している時に、進展がないと気持ちが薄れてしまう	.050	.171	.003	.320	.201	-.071
問7 f：恋愛観：恋人を選ぶときは、その人とのつきあいが私の経歴にどう影響するかを考えるべきだ	.075	-.036	-.023	-.005	.739	-.017
問7 e：恋愛観：恋人を選ぶときには、相手に経済力があるかを考えるべきだ	.057	-.003	-.112	.086	.666	-.011
問7 g：恋愛観：恋人を選ぶ前に、自分の人生を計画することが大切だ	-.067	.027	-.068	-.094	.572	.093
問7 h：恋愛観：結婚する気がない男性とは本気でつきあえない	.094	-.036	.197	-.161	.365	.090
問7 i：恋愛観：長いつきあいの友人から恋人をえらぶと、良い恋愛になる	.038	-.003	.145	-.013	.022	.638
問7 k：恋愛観：友だちとして接している人の中から、恋人を見つけるべきだ	-.046	.053	.098	.107	.055	.493
問7 j：恋愛観：恋愛関係になっても、相手との友情を大切にしていくな	.172	.043	-.187	.048	.053	.444

表5：固有値の変化

因子	初期の固有値			抽出後の負荷量平方和			回転後の負荷量平方和
	合計	分散の %	累積 %	合計	分散の %	累積 %	合計
1	8.165	26.339	26.339	7.659	24.706	24.706	5.905
2	2.736	8.827	35.166	2.269	7.320	32.026	5.741
3	2.326	7.502	42.668	1.693	5.462	37.488	4.416
4	1.885	6.080	48.748	1.419	4.577	42.065	3.635
5	1.485	4.789	53.538	1.012	3.266	45.331	2.360
6	1.355	4.370	57.908	.772	2.491	47.822	1.387
7	.916	2.956	60.863				
8	.902	2.911	63.774				
9	.773	2.494	66.268				
10	.744	2.401	68.669				
11	.686	2.214	70.883				
12	.673	2.173	73.056				
13	.659	2.125	75.181				
14	.623	2.010	77.190				
15	.598	1.928	79.118				
16	.576	1.858	80.976				
17	.561	1.809	82.785				
18	.516	1.665	84.450				
19	.492	1.586	86.036				
20	.475	1.531	87.567				
21	.450	1.451	89.017				
22	.447	1.442	90.459				
23	.425	1.372	91.832				
24	.408	1.317	93.149				
25	.380	1.224	94.373				
26	.334	1.077	95.450				
27	.324	1.046	96.495				
28	.312	1.006	97.501				
29	.288	.928	98.429				
30	.255	.823	99.252				
31	.232	.748	100.000				

表6：校種別の各因子の平均値

	校種	度数	平均値	標準偏差	t 値	自由度
恋愛向上志向	専門学校	491	2.9050	.67180	2.16*	960.67
	大学	770	2.8245	.60261		
恋愛苦悩志向	専門学校	489	2.0847	.74321	-.90	1265.00
	大学	778	2.1228	.72285		
恋愛没入志向	専門学校	493	1.7373	.61131	2.21*	1268.00
	大学	777	1.6622	.57710		
恋愛享楽志向	専門学校	493	2.1420	.64559	-1.48	1274.00
	大学	783	2.1960	.62634		
恋愛実利志向	専門学校	491	2.5036	.65843	2.47*	1263.00
	大学	774	2.4144	.60388		
友愛志向	専門学校	494	2.5290	.60866	-.13	990.92
	大学	774	2.5336	.56357		

* p < .050

3. 考察

本研究では、上野（2004）が青年期向けのメディアに基づいて作成した尺度に、LETS-2に示されたプラグマとストルゲを測定する設問を追加することで、恋愛観をより網羅的に測定できる尺度の作成を試みた。大学生と専門学校生の両方を含む、従来の研究より幅広い属性の青年期女性を対象に調査を行った結果、当初の想定に従った6因子からなる尺度を構築できた。

各因子の平均得点（表6）を見ると、プラグマとストルゲに相当する「実利志向」と「友愛志向」の得点は、他の4因子のそれと比較して、特に低い値となっていない。上野の先行研究にこれらの因子を補完したことは、それなりの改良と言えるのではないだろうか。「恋愛苦悩傾向」は、他の因子に比べて平均得点が低くなっているが、「平穏な生活ができなくなる」「苦しくなる」といったネガティブな心理状態を含むため、当然の結果と考えられる。この因子は、今後、本尺度による恋愛観と様々な要因

との関連性を検討する際に、恋愛関係により心理的な不適応をきたしやすい人の背景を探る上で有用だと考えられる。

「恋愛向上志向」「恋愛没入志向」「恋愛実利志向」の3因子では、専門学校生と大学生との間に有意な差が見られた。小倉（2007）は、女性が結婚に求めるものが学歴によって異なることを指摘しており、高卒の場合は「生存」、短大卒は「依存」、四大卒は「保存」を求めるとしている。「恋愛向上志向」や「恋愛実利志向」の差は、こうした結婚観の違いと関連していると思えることもできる。学歴や経済面での階層によって、接するメディアが異なっていて、それが恋愛観の違いを生み出している可能性も考えられよう。本研究の結果を端緒として、恋愛観と様々な社会的要因の関連性が解明されることが期待される。

【謝辞】

本稿のベースとなった調査では、以下の方々の協力を得た。記して感謝の念を示す。梶尾友葵、角みのり、

高野由依, 高松那緒, 千葉友貴, 古野菜々美, 向井美結.

[註]

- 1) 本稿は、中村編(2018)の序文、第1章、第2章の内容を全面的に書き直す形で執筆されている。各種の統計的分析は改めてやり直した。また、確証的因子分析での確認、校種別の因子得点比較といった分析を新たに付け加えた。
- 2) 上野論文のベースとなったのは女子大学生266名(大学の数は明らかにされていない)を対象とする量的調査である。同調査で使用された調査票には、恋愛に対する態度以外に、結婚に関する態度を問うた質問、性交渉に対する態度を問うた質問も配置されている。
- 3) 松井ら(1990)では、調査対象者の所属する大学が、国立・公立、私立すべてを網羅しており、その所在地も都内と周辺地域に分散させることで、対象者の偏りに配慮している。しかしながら、大学に進学しない層については考慮されていない。本研究の場合も、高校卒業後、進学せずに就職する層やいわゆるフリーターになる層については対象に含まれていないという問題を抱えている。この問題を解消するためには、高坂・小塩(2015)のように、インターネット調査会社に委託するといった方法がある。今後は、そうした方法を用いることで、さらに幅広い層を対象として尺度の妥当性を確認することが望まれる。
- 4) 上野論文は因子抽出に主成分法を用い、回転にはvarimax法を採用している。しかし、上野が抽出した「恋愛没入主義」と「恋愛苦悩傾向」、「恋愛享楽主義」と「恋愛没入志向」、「恋愛享楽主義」と「ストルゲ」などの間には有意な相関があることが想定される。すなわち、上野が提示した質問群は、それら全体で「恋愛に対する態度」を測定している可能性がある。くわえて、今回、探索的因子分析の対象となり得たサンプルサイズは1270を超え、上野論文のサンプルサイズの約4.8倍に達した。これらを勘案し、本稿では、

因子抽出法としては変数の共通性を前提とし、サンプルサイズが大きい場合により正確な推定ができる最尤法を採用、初期解の回転にあたっては、因子間の相関を前提としたpromax法を使用した。

[文献]

- 金政祐司(2002). 恋愛イメージ尺度の作成とその検証—親密な異性関係、成人の愛着スタイルとの関連から 対人社会心理学研究 2, 93-101.
- 高坂康雅(2016). 恋愛心理学特論——恋愛する青年／しない青年の読み解き方 福村出版.
- 高坂康雄・小塩信司(2015). 恋愛様相尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 発達心理学研究 26, 225-236.
- Lee, J. A. (1977). A typology of styles of loving *Personality and Social Psychology Bulletin*, 3, 173-182.
- 松井 豊・木賊知美・立澤晴美・大久保宏美・大前晴美・岡村美樹・米田佳美(1990). 青年の恋愛に関する測定尺度の構成 東京都立立川短期大学紀要 23, 13-23.
- 水野邦夫(2006). 恋愛心理尺度の作成と恋愛傾向の特徴に関する研究——Leeの理論をもとに 聖泉論叢 14, 35-52.
- 中村晋介(編)(2018). 現代青年のファッション選好・恋愛観に関する研究——大学生・専門学校生を対象とする調査より 福岡県立大学人間社会学部公共社会学科.
- 小倉千加子(2007). 結婚の条件 朝日新聞出版.
- 総務省(2017). 日本の統計2017 <http://www.stat.go.jp/data/nihon/index2.htm> (2017年12月1日最終閲覧)
- 谷本奈穂(2008). 恋愛の社会学——「遊び」とロマンティック・ラブの変容 青弓社.
- 上野行良(2004). 現代女子青年の恋愛に対する態度の諸側面 福岡県立大学紀要 13-1, 15-29.
- 和田 実(1994). 恋愛に対する態度尺度の作成 実験社会心理学研究 34, 153-163.

(2018.5.16原稿受付. 2018.6.27掲載決定)